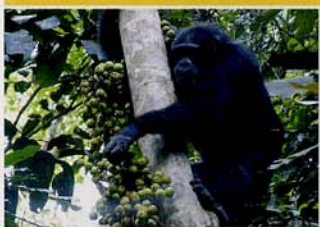


ボツソウ村の目抜き通りから見た、チンパンジーが生息する真山



村落の周辺部までやってきてパイヤを食べるチンパンジー

道路を横断するチンパンジーと道を譲る村人



好物のイチジクの実を食べるチンパンジー



チンパンジー

(学名: *Pan troglodytes*)

ヒト科。アフリカ大陸の熱帯林地帯を中心に分布する。近年、個体数減少が著しいとされ、IUCN(国際自然保護連合)のレッドリスト(2004年)で絶滅危惧IB類に分類されている。進化史上ヒトにもっとも近縁な現生種であり、約400~700万年前に共通祖先から分岐したと考えられている。かつてはゴリラ・オランウータンなどとともにおらんウータン科に分類されていたが、近年の遺伝的距離を重視した分類では、ヒト科とされる。成熟果実を中心とした雑食性で、サル類の狩猟による肉食や、道具を用いた昆虫食が知られている。

生きもの

博物誌

【チンパンジー／ギニア】

ヒトとチンパンジーの差は数パーセント

山越 言

(やまこし げん)

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科助教授

チンパンジーは進化の隣人

チンパンジーという動物について、どのような印象をおもちだろうか。ソウヤキリンのような圧倒的な存在感をもつわけではなく、バンダヤシマウマのような美しさからもほど遠い。しかしながら、チンパンジーは、現生のすべての動物のなかで、進化的にヒトにもっとも近縁であるという、圧倒的にユニークな特徴をもっている。

野生チンパンジーの行動・生態研究によって、道具の使用や狩猟行動、「政治的な順位争い」といった、さまざまな「人間的」な姿が明らかになってきた。昨年、ヒトと数パーセントの違いしかないといわれてきたチンパンジーのゲノム(※1)が解読された。すでに終了しているヒトゲノムとの比較によって、約四〇〇〜七〇〇万年前に両種が分岐し、違いを見せることになった進化的要因についての分析が期待されている。チンパンジーが「進化の隣人」にもよばれる所以である。

遺伝的・生理的にヒトに近いチンパンジーは、エイズや肝炎研究のための貴重な医学実験動物として使用されてきた。反面、チンパンジーのような「人間的」な存在を「監視し」、「虐待」することへの批判も強い。「動物の権利」運動の文脈の中で、高度な知的能力をもつチンパンジーには、「人権」を認めるべきだという主張もある。このように、現代社会においてチンパンジーは、ヒトと動物の境界に位置する多義的な存在となっている。

祖先が姿を変えたもの

ところで、西アフリカ・ギニア共和国の片隅に「進化の隣人」であるチンパンジ

ーと人びとが、文字どおり「隣人」関係にある村がある。ギニア南部の森林地域に位置するボツソウ村では、村の裏山にあたる小さな丘に、ひと群れのチンパンジーが生息しており、村人たちによって手厚く保護されてきた。生息地である丘は、村人にとつての神聖な場所であり、日常的な立ち入りや樹木の伐採が固く禁じられている。通過儀礼などのさまざまな儀礼の場であり、精霊の住まう森でもある。このため、丘の中腹より上は直径一メートルを超す巨木が林立し、チンパンジーにとっては格好のすみかとなっている。進化とも動物の権利とも無縁なこの村で、チンパンジーはどのような存在なのだろうか。この村では、チンパンジーは村を創立した氏族のトテム動物(※2)であるため、殺したり、食べることが禁止されている。村人は言う。また、今は野生動物のように見えるチンパンジーは、かつて村人の先祖にあたる人びとが、姿を変えたものであるとも言っている。これもチンパンジーはヒトと動物の境界をさまざまに存在であるようだ。

この村では一九六〇年代よりチンパンジーの生物学的研究が盛んにおこなわれてきた。近年ではチンパンジーを見にやってくる観光客の数も急増している。このような動きのなか、人からの感染が疑われる呼吸器系疾患によりチンパンジーの数が激減し、現在その存続が危ぶまれている。村人と私たち研究者は、ボツソウのチンパンジー保全のため、「われわれの祖先を守る」というスローガンの下、協力して活動している。チャールズ・ダーウィン博士に聞かせたら、なんと言うだろうか。

(※1)細胞に含まれる染色体の一組
(※2)氏族と象徴的な関係で結びつけられている動物